

## 2025年度 学力検査実施要項

1. 科目 「現代の国語, 言語文化 (古文・漢文を除く)」
2. 時間 10:00～11:00
3. 注意事項

### 【問題に関する注意事項】

- ① 検査開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけない。
- ② 問題は、3～26ページである。  
検査中にこの冊子の印刷不鮮明、ページの乱丁、落丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- ③ この冊子の余白等は適宜利用してよいが、切り離してはいけない。

### 【解答に関する注意事項】

- ① 解答用紙は「マーク解答用紙 (1)」、「記述解答用紙」の2枚である。解答用紙に受験番号、氏名、フリガナを正しく記入すること。  
受験番号、氏名未記入のものは、採点せず0点とする。
- ② 解答は、それぞれ指定の用紙の解答欄に記入すること。
- ③ マーク式の解答番号は、付数字 (  …)、選択肢は○付数字 (①②…) で示されている。例えば、 に対して③と解答する場合は、(例)のように解答番号20の解答欄の③に正確に、濃くマークすること。マークはHBまたはBの鉛筆を使用すること。消し方が不十分な場合、マークしてあるものとして処理されることがあるので、消す場合は完全に消すこと。

(例)

解答番号	20
解 答 欄	①
	②
	●
	④
	⑤
	⑥
	⑦
	⑧
	⑨
	⑩

### 【その他注意事項】

- ① 検査実施中の退出は認めない。ただし、途中で気分が悪くなった場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- ② 検査終了の合図で鉛筆等を置き、解答用紙の回収終了まで鉛筆等に触れてはいけない。
- ③ 検査終了後、この冊子と解答用紙を並べて置くこと。



二〇二五年度 学力検査

「現代の国語、言語文化（古文・漢文を除く）」

<input type="checkbox"/> 二 問 8	記述式
<input type="checkbox"/> 一 ～ <input type="checkbox"/> 三 問 7	マーク式 解答番号 <input type="checkbox"/> 1 ～ <input type="checkbox"/> 24

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

科学の新たな方向として、「ケア<sup>(1)</sup>としての科学」とも呼べるような姿が浮かび上がってくる。それはなおおぼろげな段階にとどまっているが、その大きなあり方としては、以下のような視点ないし自然観・世界観の方向が重要な柱になってくると思われる。

- (a) 関係性の科学
- (b) 個別性・多様性の科学
- (c) 内発性の科学

まず (a) として挙げた「関係性の科学」については、19世紀半ばに「エコロジー」という言葉を作ったドイツの生物学者エルンスト・ヘッケルが、その著書においてエコロジーを「有機体とその環境の間の諸関係の科学」と定義したことが想起される。

「関係」についての科学という発想は、要素あるいは実体に着目する近代科学の中では特異と言えるものだが、近年においては他でもなく先ほど「ソーシヤル・ブレイン」や「社会疫学」などにそくして指摘したように、こうした「関係性」に注目する様々な研究や領域が台頭しているのである（ちなみにここで、私自身が学生時代に大きな影響を受けた、「関係の一次性」を論じた哲学者・廣松渉<sup>ひろまつわたる</sup>の議論が思い出される。廣松の後期の印象深い著作として『生態史観と唯物史観』があるが、この本に限らず、彼が（そのマルクス理解において）一貫して強調した「人間は社会的諸関係の総体である」という把握は、文字通りエコロジカルな世界認識と言え、「関係性」という点においてケアとエコロジーはつながるのである）。

I

また奇しくも、本章の冒頭で生物多様性や生態系の危機と資本主義や科学の関係性について言及したのだが、「エコロジー」の原義が上記のように「関係性の科学」とすれば、それは近代科学が構造上必然的にキケツ<sup>(a)</sup>させてしまう危機、そしてそれを乗り

越える科学のありようというテーマと直接に関わっていると見えるだろう。

II

議論を急ぐと、(b)の「個別性・多様性の科学」とは、事象を「普遍的法則」のみにカンゲンしてしまうのではなく、ケアの営みがそうであるように、人間一人ひとりあるいは様々な事物や出来事の個別性・一回性に注目するとともに、そうした個別性や多様性がなぜ生じるかという、その構造の全体を俯瞰的に把握するような科学のあり方を指す。

そして(c)の「内発性の科学」は、対象や自然を単なる受動的な対象として(機械論的に)把握するのではなく、それらが持つ内発的あるいは自己組織的な力を積極的に位置づけていくような科学のありようである。たとえば非平衡熱力学と呼ばれる領域でノーベル化学賞を受賞したイリヤ・プリゴジンの「混沌からの秩序」論、つまり非生命的な現象においても混沌から秩序が形成されていくような自己組織性を自然が有しているという把握などが挙げられるだろう。

ここで、こうした「ケアとしての科学」と呼べるような新たな科学の方向が持つ意味を見えやすくするため、(b)の「個別性・多様性の科学」に関して、昨今様々な議論がなされている「再現可能性」をめぐる問題を取り上げてみよう。

確認すると、「再現可能性(再現性)」とは、科学論文で示された実験結果などが同じ方法や手順を踏めば文字通り「再現」できるとを意味している。これは、先述のように近代科学の根幹をなす考え方の一つである「普遍的な法則」の追求ということから、<sup>おの</sup>自ずと導かれる考え方と言える。

III

ところが、特に生命科学などの分野を中心に、近年そうした「再現可能性」が危機にAいると多くの研究者が感じているとの調査結果が科学雑誌『ネイチャー』に掲載され話題となった。同調査によれば、研究者1576人からの回答で、52%が(再現性が)「大いに危機的」、38%が「やや危機的」と答えたというのである。関連して、日本医学会連合も再現性をめぐる問題への提言をまとめている。

では、アなぜこうした問題が生まれるのか。いわゆるデータの捏造や研究不正といった類の問題は別にして、ここで考えてみたいのは「再現可能性」というテーマの根本にある、科学や自然のあり方をめぐるBな問題である。

大きく振り返れば、17世紀の科学革命イコウ<sup>(c)</sup>、科学の前線は物理的現象から生命現象、そして人間へと、いわばより複雑で、単純な法則にはカンゲンできないような現象へと歩みを進めてきたと言える。

IV

だとすればそうした過程で、「科学」の探究が生命現象や人間など、複雑かつ個別性の高い領域に及べば及ぶほど、「再現可能性」の問題が **C** のは、ある意味で当然のこととも言える。<sup>(注3)</sup> トートロジー的に言えば、再現性が困難な現象ないし領域が科学的探究の対象になってきているから、再現性が困難になる<sup>〃</sup>ということだ。

V

一例を挙げてみよう。臨床心理学などの領域に関わるものだが、たとえば不登校だった小学生のある男の子が、周りの人々の様々な関与や、偶然を含む出来事の展開の中で、1年の時間の経過の中で次第に学校に通えるようになったという事例を考えてみる。その変化の過程において、何が重要な要因だったか<sup>〃</sup>を探るのは「科学的探究」そのものだが、こうした事例が「再現可能」かという点、それは否だろう。理由は簡単で、その男の子が置かれた状況や変化の過程を100%再現することは不可能だからであり、人間、**イ** その心理や社会的関係性が関わる領域においては、再現可能性が成り立たない場合のほうがむしろ一般的と言える（ちなみにこの話題は、かつてドイツの哲学者ウィンデルバントが、学問を「個性記述的」と「法則定立的」の二者に分けた議論を思い出させる面がある）。

その上で、私がここで「ケアとしての科学」の柱の一つとして考える「個別性・多様性の科学」とは、次のような趣旨のものだ。

すなわち、一方で事象の「個別性」や「多様性」に十分な関心を払いつつ、しかしそこで働いている普遍的な原理の追求を全く放棄してしまうのではなく、その両者を深い次元で総合する。言い換えれば、人間一人ひとりあるいは様々な自然事象や事物の個別性・一回性に注目するとともに、そうした個別性や多様性がなぜ生じるかという、その構造の全体を俯瞰的に把握するような科学のあり方ということである。

以上は多少わかりにくく聞こえるかもしれないが、たとえば、

- ① 人間の「文化の多様性」と生物学的レベルを含む「普遍性」との関係性をめぐる人類学的探究
- ② 地震が生じる際の普遍的な法則ないしパターンと個別の地震の発生メカニズムや予知・予測に関する研究
- ③ 遺伝子ないしDNAレベルでの決定性ないし普遍性と、それが具体的・個別的な環境と相互作用しつつ様々な特性が現れることを探究する「エピジェネティクス」の研究

など、こうした方向は様々な科学の領域で生成、展開していると思われる。

さらに、ここで述べている「個性・一回性と普遍性の総合化」というテーマは、実は次のような「ローカル・グローバル・ユニバーサル」という話題と重なり合うものである。

すなわち、通常「グローバル化」ないしグローバルイゼーションということが言われる場合、それは、マクドナルド的に世界が一様に均質化していくといった意味で使われることが多い。

しかし、「グローバル」とは、そうした均質化・一様化という意味では決してないのではないか。つまり本来の「グローバル（地球的）」とは、むしろ地球上の各地域の「ローカル」な風土や文化の多様性を積極的に評価しつつ、ヒトの（生物）種としての「ユニバーサル」な普遍性の中で、そうした文化の多様性が生成する構造を、俯瞰的に把握するような態度あるいは世界観を意味するはずではないか。

つまり、「ローカル」（地域的・個別的）と「ユニバーサル」（普遍的・宇宙的）という対立的な二者を、架橋ないし総合化（または、止揚）する理念としての「グローバル」ということが考えられるのである。経済社会のありようにそくして言うならば、ローカルな場所ないし地域から出発しながら、有限な地球において文化や資源が共存していくような社会システムの構想が求められている。

ここで「個性・多様性の科学」と呼んでいる新たな科学の姿は、そうした経済社会をめぐる展望とも重なるだろう。

（広井良典『科学と資本主義の未来——〈せめぎ合いの時代〉を超えて——』より。

出題の都合上、一部中略・変更した箇所がある）

（注1） ソーシャル・ブレイン——他者との相互作用や社会的な関係性こそが、人間の脳の形成や機能にとって本質的な意味を持つとする考え方。

（注2） 社会疫学——他者との関わりやコミュニティとのつながりといった要因が、人間の健康や病気の生成に決定的な影響を与えていることを明らかにしようとする学問。

（注3） トートロジー——同じことを表すことばの無用な繰り返し。同語反覆。

問1

傍線部(a)～(c)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 1、(b) 2、(c) 3。

(配点6点)

(a) キケツ

1

- ① 武器を捨てキジュンの意思を示す。
- ② ケガで選手が試合をキケンする。
- ③ キシヨウ価値のある宝石を集める。
- ④ 若くして人生のキロに立たされる。
- ⑤ 事業設計のキドウ修正を迫られる。

(b) カンゲン

2

- ① 橋のランカンにもたれる。
- ② 試合に勝利してカンキに沸く。
- ③ 相手の狙いをカンパする。
- ④ カンマンな動作で立ちあがる。
- ⑤ 叔父がカンレキを迎える。

(c) イコウ

3

- ① 時節に合ったカツコウで出かける。
- ② 両者ともコウオツがつけがたい。
- ③ ハテンコウな大事業に挑む。
- ④ 相手のコウシに深く感謝する。
- ⑤ 敵に屈服してトウコウする。

問2 次の文は本文の一部である。どこに入れるのが最も適当か。本文中の I ～ V の中から選びなさい。

解答番号は、4。

(配点4点)

言い換えれば近代科学は、一つの数式で表現できるような、普遍性そして再現性が高い現象から順に取り上げていき、次第に探究の対象を広げてきた。

- ① I      ② II      ③ III      ④ IV      ⑤ V

問3

空欄 A ～ C に入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、A 5、B 6、C 7。

(配点9点)

- |                 |                           |                           |                          |
|-----------------|---------------------------|---------------------------|--------------------------|
| C               | B                         | A                         |                          |
| 7               | 6                         | 5                         |                          |
| ① 後に引けなくなる      | ① 演繹的 <small>えんえき</small> | ① 巡 <small>めぐ</small> りして | ① 陥 <small>おと</small> して |
| ② 取りつく島もなくなる    | ② 社会的                     | ② 寓 <small>ぐう</small> して  | ② 抗 <small>か</small> して  |
| ③ 一筋縄ではいかなくなる   | ③ 歴史的                     | ③ 瀕 <small>ひん</small> して  |                          |
| ④ 枚挙にいとまなくなる    | ④ 継続的                     |                           |                          |
| ⑤ につちもさつちもいなくなる | ⑤ 歴史的                     |                           |                          |

問4

空欄

ア

イ

に入る最も適当な語を、次の中から選びなさい。ただし、同じ語を二度使ってはならない。

解答番号は、ア **8**、イ **9**。

(配点6点)

- ① しかも
- ② とりわけ
- ③ それゆえ
- ④ すなわち
- ⑤ または
- ⑥ たしかに
- ⑦ そもそも
- ⑧ にもかかわらず

問5

傍線部(1)「『ケアとしての科学』」とあるが、その特徴の説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

**10**。

(配点6点)

- ① ヘッケルによるエコロジーの定義が、科学において「関係性」に着目する様々な研究や領域の拡大を決定づけた。
- ② マルクスが唯物史観と自然をケアする思想であるエコロジーとを関連付けていたことを、廣松は一貫して強調した。
- ③ ある事象について、構造を全体的に理解する態度と、多様な構成要素個々への視点を併せ持つことが求められる。
- ④ 既存の研究対象を受動的に把握するのではなく、人間の内なる欲求や自己組織力を積極的に認めることで成り立つ。
- ⑤ 科学の普遍性を担保する「再現可能性」と関連する「個別性・多様性の科学」が、最も重要な柱であると言える。

## 問6

傍線部(2)「『再現可能性(再現性)』とあるが、これについての危機的状況がなぜ発生したと筆者は考えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、11。

(配点6点)

- ① 再現可能性や法則の追求に危機を感じる人が、現代の最先端である生命科学分野の研究者を中心に増えてきたから。
- ② 物理的現象を再現して見出<sup>みいだ</sup>される普遍的な法則は単純であると認識され、より複雑な領域が研究対象となったから。
- ③ 特定の人間に対して効果のあった科学的な関与が、他の人間にも有効であるとは限らないような事象が増えたから。
- ④ 科学の研究対象が、実験結果を再現することで普遍的な法則を打ち立てることが難しい領域に拡大していったから。
- ⑤ 科学において個別性・多様性を追求すれば、おのずと再現は不可能かつ無用のものと認識されるようになったから。

## 問7

傍線部(3)「私がここで『ケアとしての科学』の柱の一つとして考える『個別性・多様性の科学』とあるが、次の具体例のうち、筆者の考えに即していないものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、12。

(配点6点)

- ① 科学的な根拠に基づく災害時の有効な避難や対処方法を、個別の災害の規模や地理的事情に応じた形で適用する。
- ② 異なる民族が何を「美」とするかを個々に調査・研究すると同時に、人間が「美」を求める一般的な理由を探る。
- ③ 世界各地にある風俗・習慣を個別に記録しつつ、欧米の文化が普遍性を獲得していった過程を歴史的に考査する。
- ④ 同様の症例を示す患者を個別の要望に応じて治療しながら、患者間の共通の要望を抽出して今後の治療に生かす。
- ⑤ 健康維持のための普遍的な食事や運動を研究し、それを年齢や性別などに応じて個々に改変しつつ適用していく。

問8 本文の内容に合致するものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、13。

(配点6点)

- ① 「個別性・多様性の科学」が適用される範疇はんちゆうは、いわゆる自然科学の領域に留まらないものと筆者は考えている。
- ② 近代科学が要素や実体に着目していたことは、筆者の主張する「個別性・多様性の科学」に通底するものがある。
- ③ 科学の研究領域が複雑化・個別化したことでその正当性の判断が難しくなり、研究不正のような問題しゅつたいが出来た。
- ④ 「ケアとしての科学」という表現は筆者独自のものだが、この考え方自体は現代科学において主流となっている。
- ⑤ 個々の人間を対象とする臨床心理学は、その性質上、全ての事象に共通する普遍的原理の追求を諦めるしかない。

二 次の記事を読んで、後の問いに答えなさい。

現在、地球上で国家の統制や商業の経済から逃れられる場所をみつけるのは不可能に思える。どこにアナキズムの可能性をみいだせるのか。たぶん流れに身をまかせているだけでは、その大きな渦から抜けだすことはできない。ささやかな抵抗の場をみいだし、スキマをこじあけていく。そんな動きが必要になる。

歴史上の名もなき無数のアナキストたちも、国家の支配領域から逃れただけではない。ときに国家の圧政に抵抗し、不満をぶつけ、自分たちの要求を突きつけてきた。国家なき場所は、国家から逃れた先にあるだけでなく、国家のなかにあらたにつくりだされる。そんなある種のアナキズムがずっと歴史を動かしてきた。

スコットは『実践 日々のアナキズム』で、過去三百年における重要な解放運動のすべてが警察権力をはじめ国家の法的秩序と真つ向から対決してはじまったと指摘している。

自由民主主義を実現した社会においても、不遇な状況におかれた少数者は選挙で代表を選んで社会を改善する術を奪われている。それはこれまでみてきたように、現在の「民主主義」はつねに多数派のための制度だからだ。多数派の利益を守る国家の法そのものが抑圧的などき、法の枠内でそれを改善することは困難だ。黒人への人種差別撤廃に向けたアメリカの公民権運動も、当時の法的秩序からの逸脱なしには実現しえなかった。よりよき生を実現するには、ときに国家のなかにあってなお国家の外側にする必要がある。スコットはこう書いている。

少数の勇敢な者たちが、座り込み抗議、デモ、可決された法案に対する大規模な違反などによって法律や慣習を率先して破らなければ、解放運動の拡大はありえなかつただろう。憤慨、憤懣、憤怒<sup>かんぬ</sup>によって活気づけられた破壊的な行動は、彼らの要求が既存の制度的・法的な枠組みのなかでは満たされないとこのことを見事にロテイさせた<sup>(a)</sup>。このように進んで法を破る

彼らの気持ちに内在したのは、無秩序と混乱の種を播き散らしたいという欲求ではなく、むしろより公正な法的秩序を創出しようとする強い衝動だった。現在の法治主義が、かつてよりも寛容で、解放的であるというのであれば、私たちはその恩恵を過去の法律違反者たちに負っている。

(2) ぼくらは過去の多くの「法律違反者」たちから恩恵を受けている。それをあたりまえのものとして生まれ育つと、そんな逸脱者の存在は意識しにくい。逸脱者たちを国が力で抑圧し、ねじ伏せようとしてきた歴史はすぐに忘却される。なんとなく、いまの豊かで恵まれた状況は、それこそ国がつくってくれたものだとかンチガイしてしまう。

いまこの瞬間も、よりよき状態を生み出すための逸脱がこの社会をじわじわと動かしている。くらしのアナキズムは、そんな静かな動きとつながっている。

国家の役割ではなく、生活者のできることに目を向ける「くらしのアナキズム」には落とし穴もある。国家にとっても、国民が自分たちでうまく社会をまわすようになってくれたほうが助かるからだ。自助を求める政府のもとで、下から自治をとりもどそうとする動きは、政府の思うつぼではないか。当然、浮かぶ疑問だ。

だがここでの「自治」は、国家を補完するような自治ではない。むしろ国の動きをけん制し、分け与えるよう求め、主導権をとりもどすためのものだ。国によりよき状態を要求し、その力への抵抗の足場をつくる。そのためには、まず政治や経済を動かす責任や能力が自分たちにあると自覚する必要がある。政治を政治家まかせに、経済を資本家や経営者まかせにしてきた結果、ぼくらはみくびられ、やりたい放題にやられてきた。政治と経済の手綱たづなを生活者が握り、よりよいやり方をみずから体現していく。その実践が国のやることに自信をもってNOを突きつける根拠にもなる。

台湾で急速に民主化が進んだ原点には、二〇一四年三月、日本の国会にあたる立法院を三週間あまり占拠した「ひまわり学生運動」があった。学生たちはこの議会占拠という非合法的手段を通じて、政治家に要求を突きつけ、交渉を行い、ひろく市民に

訴えかけた。彼らは政権を転覆させる「革命」を起こしたわけではない。むしろ既存の政治体制のなかで市民の力を可視化してみせたことが、政治家を動かす、社会を変えてきた。国家なき社会の政治がそうだったように、監視し、要求し、不同意を突きつける主権<sup>(4)</sup>は、つねに生活者の側にある。

国家が自分の手柄であるかのような顔をしている「民主主義」や「自由」「平等」といった価値は、国家内部の動きから実現したものではない。むしろそれへの抵抗や逸脱の結果として生まれた。だからこそ、ぼくらがよりよき状態に向けて動けるようになるには、既存の国家がおしつける「常識」から距離をとり、そこでのあたりまえをずらしていく姿勢が欠かせない。国家は暮らしのための道具にすぎない。それがアナキストの身構えだ。

巨大な国家と市場<sup>(1)</sup>に暮らしを包囲されているなかで、政府や資本主義を打倒したり、すぐに別のものにおきかえたりすることはできない。おそらくそれは最善の手段でもない。

大きなシステムは、ぼくらを単一の物語にとりこみ、思考停止させ、押し流そうとする。そこでまずできるのは、立ち止まってみることをよくみることだ。

流れに抗<sup>(2)</sup>うには、身体を支え、手をさしのべあう仲間がいる。「異なる人びとや空間、場所を架橋し互いに結びつける」。そんな異質な他者とのコンヴィヴィアルな交わりが予想外の流れの渦を生み、ノイズを増大させ、システムの暴走に歯止めをかける。富や力を独占する動きは、国家や市場<sup>(1)</sup>だけでなく、自治的な空間や市場<sup>(1)</sup>でもあらわれる。それをあたかも外部にある力のように拒絶しても、自分たちの内側からそれらが生じる現実には対抗できない。

日々の生活のなかで自由を阻害する力や暴力に敏感になり、その芽を<sup>(3)</sup>ツんでいく。ときにはゾミア<sup>(4)</sup>の人びとのように、身かわし、その力のおよばない場所に逃げる。家庭にも、働く場にも、自由や平等を損ない、自治の感覚を奪おうとする力は潜んでいる。その「いやな感じ」にちゃんと反応して<sup>(5)</sup>キビンに動けるか、日頃から別の安全な居場所を仲間とともに耕しておけるか。それが分かれ目になる。

スコットは、アメリカの自動車工場で導入された最新の効率的な組み立てラインが、労働者の目立たないサボリ行為でたびたび止められ、いらつきや怒りから多くの部品が損傷して欠陥部品が増え、設計が変更された例をあげている。最初に設計された「効率的」なラインでは、労働者がそれまで以上の速いペースで作業しつづける必要があった。机上で計算された「効率性」は、労働者の我慢と忍従に依存していたのだ。

ひとりで「いやだ」と声をあげるのはいへんだ。声をあげられないでいる人の困難に気づける場や関係も欠かせない。そうやって互いの「苦しさ」から身を守るために、隣の人と一緒にサボタージユする。動きを止める。それがよりよきに向けた抵抗の渦を生みだす。

くらしのアナキズムは、目のまえの苦しい現実をいかに改善していくか、その改善をうながす力が政治家や裁判官、専門家や企業幹部など選ばれた人たちだけでなく、生活者である自分たちのなかにあるという自覚にねざしている。

よりよいルールに変えるには、ときにその既存のルールを破らないといけない。サボったり、怒りをぶついたり、逸脱することも重要な手段になる。それなら、ぼくらにもできそうな気がする。自分の思いに素直になればいいのだから。

いやいや、ちゃんとルールを守らないとダメだ。そういう人もいるかもしれない。アナキズムは、そんな間違った真面目さ**とぶつかる。「正しさ」**は、ときに人間が完全な存在であるかのような錯覚に陥らせる。だれもがなんでも同じようにはできない。そうなるのが望ましいわけでもない。互いに不完全で、どこぼこがあるからこそ、人と人とが補いあって生きている。そのために、政治や経済がある。

正しい理念や理想を掲げて一致団結して進むのではなく、たえずそれぞれの「くらし」に立ちもどりながら、能力に応じて貢献し、必要に応じて与えられる状況をつくること。そのために異なる意見をもつ他者との対話をつづけること。そのコンヴェイヴィアルな対話には、向かうべき方向があらかじめ決まっているわけでも、ひとつの正解があるわけでもない。

なんのために、ぼくらは生きているのか、働いているのか。どんな社会で子どもを育て、仲間とともに暮らしていきたいのか。

くらしのアナキズムのそもそもへの問いかけは、かならずしも自分の内なる思いや身近な他者の生きる日常が既存のルールや理想と一致しない現実をあぶりだす。そのとき、ぼくらはなにに真面目であるべきなのか？

だれかが決めた規則や理念に無批判に従うことと、大きな仕組みや制度に自分たちの生活をゆだねて他人まかせにしてしまうことはつながっている。アナキズムは、そこで立ち止まって考えることを求める。自分たちの暮らしをみつめなおし、内なる声とその外側にある多様な声に耳を傾けてみようとうながす。その対話が身近な人を巻きこんでいく。「私たちそんなことやるために生きていくわけじゃないよね？」と。

ぼくらはときに真面目であるべき対象をとり違えてしまう。大切な暮らしを守るために、日々の生活でいやなことにはちゃんと不真面目になる。ルールや「正しさ」や国家のために一人ひとりの暮らしが犠牲にされる。それこそがぼくらの生活を脅かしてきた倒錯<sup>Y</sup>だ。

ひとりで問題に対処できなくなるまえに、一緒に不真面目になってくれる仲間をみつけ、そのささやかなつながりの場や関係を耕しておく。それが、くらしのアナキズムへの一歩だ。

(松村圭一郎『くらしのアナキズム』より。出題の都合上、一部中略した箇所がある)

(注1) アナキズム ——— 無政府主義。

(注2) スコット ——— 一九三六年。アメリカの政治学者。

(注3) コンヴィヴィアル ——— 共に生きること。

(注4) ゴミア ——— 東南アジアのベトナム、カンボジア、ラオス、ミャンマーと中国の南部四省を含む巨大な丘陵地帯。国家による支配が及ばない地域であった。

問1

傍線部(a)～(d)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 14、(b) 15、(c) 16、(d) 17。

(配点8点)

(a) ロテ|イ

14

- ① 被害状況を見てテ|イカ|ンを抱く。
- ② 容疑者の動静をナ|イテ|イする。
- ③ 著作を恩師にキ|ンテ|イする。
- ④ 損害賠償を求めてテ|イソ|する。
- ⑤ 二国間の紛争をチ|ョウテ|イする。

(b) カン|チガイ

15

- ① 注意だけでカン|ベン|してもらう。
- ② カン|ビなメロ|ディーに聴き入る。
- ③ 反復練習が何よりもカン|ジンだ。
- ④ 富士山のカン|セツが観測される。
- ⑤ 思い出の地でカン|ガイにふける。

(c) ツ|んで

16

- ① ごまをア|ツサ|クして油にする。
- ② 歴史小説の一節をバ|ツス|イする。
- ③ 共同宣言をサイ|タクする。
- ④ 被災地にキ|ユウ|エン物資を送る。
- ⑤ 手術で腫瘍をテ|キシ|ユツする。

(d) キビン

17

- ① 怒りでゴキを荒げる。
- ② 事業のためのキキンを集める。
- ③ フンキして試合にのぞむ。
- ④ 彼はキチに富んだ文章を書く。
- ⑤ スウキな運命をたどる。

問2

傍線部X「思うつぼ」・Y「倒錯」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、X 18、Y 19。

(配点6点)

X 思うつぼ

18

- ① 望み通りに進まぬ状況
- ② 予期していた状況
- ③ 悩みの元となる状況
- ④ 意思に反した状況
- ⑤ 意見に追従する状況

Y 倒錯

19

- ① 恐れおののくこと
- ② 原因となること
- ③ 正反対になること
- ④ 混乱を招くこと
- ⑤ 深く考え込むこと

### 問3

傍線部(1)「不遇な状況におかれた少数者は選挙で代表を選んで社会を改善する術を奪われている」とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

20。

(配点5点)

- ① 現在の民主主義は多数派のための制度であり、少数では法律によって社会を変容させることが困難だから。
- ② 法治主義が人々に対して寛容かつ解放的である以上、多数派の意見が通りやすい傾向が生まれるから。
- ③ 少数者の意見を実現するためには、法的秩序を破壊し、逸脱した行動をすることが求められているから。
- ④ 多数派の利益を保証しようとする法律は民衆の意見に抑圧的なため、少数者の目的達成は困難だから。
- ⑤ 歴史的に、自ら進んで法を破りたい少数者たちの欲求を満たすことによって、変革が実現されてきたから。

## 問4

傍線部(2)「ぼくらは過去の多くの『法律違反者』たちから恩恵を受けている」とあるが、そのように言えるのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、21。

(配点6点)

- ① 大規模な違反を起こした者たちを国家権力で抑圧するために、秩序ある社会の実現に向けた法整備がなされ、現在の安全な生活を達成することができたから。
- ② 少数者の憤りによる衝動的な行動によって、多数派の意見や思想の変化を実現させ、より多くの人々が活動したことで、国政の方針を変更させることができたから。
- ③ 少数者の要求が既存の制度的・法的な枠組みのなかでは満たされないことに気づいた「法律違反者」たちの多くが、選挙によって政治家となり、欲求を実現させたから。
- ④ 公正な法的秩序を創出したいという要求を果たすため、法律や慣習を率先して逸脱しつつ抗議した結果が、現在の寛容かつ解放的な法治主義につながっているから。
- ⑤ 「法律違反者」という逸脱者たちを力で抑圧し、ねじ伏せたことによって、国家が多数派からの反発を買い、それに反省した国家が方針を変えるに至ったから。

問5

傍線部(3)「生活者のできることに目を向ける『くらしのアナキズム』とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

22。

(配点5点)

- ① 国家と国民が助け合う関係をつくるために、よりよい生活を実現できる政治や経済の手法をみずから学ぶこと。
- ② 国の動きをけん制し、分配や主導権の返戻を求めて、一人ひとりが武力を使って国家に圧力をかけていくこと。
- ③ 自分たちでうまく社会をまわすため、政治と経済の主導権を握り、よりよい実践をみずから体現していくこと。
- ④ 政治や経済を動かす責任や能力が自分たちにあると自覚し、政治に参入できるよう国家に訴えかけていくこと。
- ⑤ よりよい国家を実現してもらうため、政治や経済の専門家たちに、生活のなかでの取り組みを確認させること。

## 問6

傍線部(4)「主導権は、つねに生活者の側にある」とあるが、そのように言えるのはなぜか。その理由として最も適当なもの、次の中から選びなさい。

解答番号は、23。

(配点5点)

- ① 「民主主義」や「自由」「平等」という考え方は、生活者が政権を転覆させる「革命」を起こしたことによって実現されたから。
- ② 既存の政治体制のなかで市民の力を可視化させるため、生活者は常に非合法な手段によって不平不満を訴えることができるから。
- ③ 国家権力への生活者の監視や要求や不同意の提示に対し、政府が常に耳を傾けることによってよりよい社会が生まれただから。
- ④ 国家がおしつけてきた「常識」を実現するために、生活者がみずから主体的に考えて行動することでよい社会が実現できたから。
- ⑤ よりよき社会の実現は国家が達成したのではなく、国家に対する生活者の抵抗や逸脱の結果として生まれたものだから。

## 問7

本文を読み終えた高校生が、内容について話し合っている。本文に即した説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、

24。

(配点6点)

- ① Aさん 歴史上のアナキストたちは、国家の統制から逃れるために、国境のスキマをこじあげ、国家なき場所を作り出したのですね。
- ② Bさん 台湾で起きた「ひまわり学生運動」に参加した学生たちは、市民に民主主義への参加を要求し、政治家たちを動かすことに成功したと説明されています。
- ③ Cさん 筆者は、家庭や職場にも自由や平等を損ない、自治感覚を奪おうとする力があるので、政治経済の情報に敏感であるべきだと主張しています。
- ④ Dさん くらしのアナキズムでは、目先の現実を改善する力が、自分たちのなかにあるという自覚をもつことが重要であると述べられています。
- ⑤ Eさん 筆者は、ひとりで問題に対処するのではなく、他者との対話を通して、一緒に既存権力を破壊する仲間を見つけるべきだと結論づけています。

## 問 8

二重傍線部「間違った真面目さ」とあるが、筆者はなぜこの「真面目さ」を「間違っ」ているというのか。それを説明した次の文の空欄に当てはまる内容を、「受動的」の語を用いて句読点を含め40字以上50字以内で書きなさい。

解答は、記述解答用紙に縦書きで記入しなさい。

(配点10点)

人間の不完全さを認めず、

態度だから。

(以下余白)

